



日本海軍、呉鎮守府の歴史関連

(1) 日本海軍設置について

ペリー来航で眠りから覚めた日本に見えた世界は、驚愕的に進歩した巨大兵器や、科学技術、政治経済、教育文化形態・・・などと共に、世界は全て「仮想敵国!!」という実態でした。

そんな中で、列強国と対等に向き合うには、◆欧米の「最新文明や産業基盤を輸入」し、◆「洋式海軍も創設」し、《先進国の体》を整えることが急務です。

それには大きな問題にぶつかりますが

- ① 「財源と労働力確保」は、朝鮮半島に進出し、協力関係《日朝修好条規》(1874)を締結し徴用工などを徴募し、
- ② 「海軍創設」には、速やかに(横須賀、呉、佐世保、舞鶴)の4カ所に海軍鎮守府設置を計画し開庁に漕ぎつけ、
- ③ 鉄道やダム建設、富岡製糸場など産業基盤の整備、艦船建造施設など、国内のあらゆるインフラや、産業近代化などを意ピッチで進め

軍事力強化を計りました。

ここに、鎮守府とは、日本周辺海域を4分割し、各海区に『兵員養成、軍港、海軍工廠(艦船の建造、修理、兵器の製造等を行う工場)、及び海軍病院、海軍水道などの機関や施設を設け、運営や監督を行う《海軍本拠地》』です。

具体的な設置場所は、敵艦攻撃の防御や、艦艇の航行・停泊の便、水深、交通、物資調達、兵員募集など諸条件の最も適する港(軍港)として、①横須賀は以前から手掛けていた「横須賀製鉄所」を引継ぎ、②呉と ③佐世保 が明治19年(1886)に、④舞鶴は少し遅れ明治22年(1889)に設置が決まりました。

(2) 呉鎮守府開庁

(当時)人口 1万人足らずの半農半漁の町は、干拓が進み、豊漁・豊作を祈る祭事が催され、町の平穏を“亀山神社”が威風堂々と見守っていました。

そこに日本海軍の鎮守府設置が決まると、亀山神社は移転し、軍用地に掛かる住居地は一方的移転させられ、漁場も制限され、灌漑用水も軍優先に・・・など、住民生活はかなり圧迫されました。

しかし、のどかな町は、あちらこちらで工事の槌音が響き、広い道路が縦横に整備され、川に橋が架かり、軍用地はレンガ造りの庁舎が次々建ち並んで、(明治22年)「呉鎮守府」は開庁した。

その後も、呉は、特に敵艦攻撃の防御の有利性から、海軍機能上「最新・最大・最重要施設」が次々設置され、数年後には、日本製第1号艦 “宮古”の起工、前後して日清戦争(1894)勃発、続いて日



露戦争も(1905)勃発・・・と、日本にとって重大な試練の場を次々経験していきます

(3)清国;北洋艦隊「定遠他」の回航

🚩 こうして「海軍創設 ⇒ 補強・整備」が始まると、早速「日清間」の雲行きが怪しくなります。

つまり、当時の朝鮮半島は、「清国」に従属状態だったので、日本の「朝鮮侵出」に対する牽制か(?)、清国軍は、日本第一の巡洋艦(「浪速・高千穂」)の2倍もある「自慢の新鋭艦「定遠・鎮遠」を旗艦とする艦隊を日本各地に回航し、威圧してきました。

それは横浜沖に停泊し、「定遠」に皇族や大臣、陸海軍将校、新聞記者等の首脳人を招いてレセプションを催し、招待客にその偉大さを見て圧倒されました。

しかし、その後、艦隊は宮島沖にも回航し、呉鎮守府の首脳人も招待されました。

(4)東郷平八郎

◆イギリス留学(1871-78)

🚩 東郷平八郎は、薩摩藩士として幕末の戦闘で悲惨さを経験し、当初、軍人の志しはなかった様です。

しかし英国に留学して人生が変わりました。

英国では、英語、数学、理科など基礎を学んだ後、入学した商船学校は、船が校舎であり宿舎で、船上での実践授業では「学術優秀、品行方正、礼儀正しい」という彼の評価だった様です。

卒業後、世界一周航海では、マストに上り、風の強さや方向、天気の変化や波の変化を即座に予測して操船する技術と、それに併せて商船と雖も「戦い」に対する国際法や愛国心も学びました。

◆呉鎮守府に在任中 =「北洋艦隊(清国軍)の来航」=

🚩 東郷は帰国して 10 年余り後、(留学で学んだ資質を買われて(?))、呉鎮守府開庁と合わせる様に「呉鎮守府参謀長」に就任(1890/ 5~1891/12)しました。

呉に就任後、早速、清国軍「北洋艦隊」自慢の「定遠」他の艦隊は、宮島沖にも回航され、東郷も視察しました。

しかし東郷は、軍艦は強大堅固だが、甲板が不潔で整理整頓が不備で、自慢の26cm主砲には洗濯物を干しているなど「乗務人員の訓練も実戦能力も未熟で、海軍将校も指揮官の間も不統一で、近代国家の軍隊とは言えない」ことを見破っていました。



呉; 東郷邸(離れ)



防護巡洋艦「浪速」

それは「日清戦争」の予兆と見るべきか(？)、恐らく(東郷は) **東郷邸(離れ)** で、来るべき日清戦争を予感しながら、作戦などを練っていたのではないのでしょうか(？)

それから間もなく、防護巡洋艦「浪速」の艦長に就任(1891)しました。

◆東郷平八郎と日清戦争

🌟それから3年後、遂に「日清戦争」が勃発すると、「吉野」、「高千穂」、「秋津洲」、「浪速」(= **東郷艦長**)の艦隊(=何れも高速艦)が編成され、清国「北洋艦隊」と、高速速射砲(高速で近づき速射砲を連発する)で交戦し、戦争を勝利に導きました。

それにより「東郷の能力」が国内外に知られる所となりました。しかし、東郷の名が もっと『**世界の英雄**』と崇められるのは、この10年後に起こる日露戦争「**日本海海戦**」(後述)での快挙です。

その前後、東郷は次の職を歴任しています。

◇(1890-91) **呉鎮守府参謀長**

◇(1891-)巡洋艦「浪速」艦長 ⇒◆(1894—95) **日清戦争**(豊島沖、黄海、威海衛海戦)

◇(1899—1900)佐世保鎮守府司令長官

◇(1901—1903)舞鶴鎮守府司令長官

◇(1903)連合艦隊司令長官 ⇒◆(1904—05) **日露戦争**(日本海海戦)

◆肉じゃが<論争>

🌟ところで、東郷平八郎は、イギリス留学中(1870~78)に食べたビーフシチューが非常に気に入り、帰国後に艦上食として作らせ様としました。しかし日本の料理人にレシピが伝わらず、醤油と砂糖を使ってできたのが「肉じゃが」だったという(実情は定かでない)。

しかしそれから約100年後、舞鶴市は、東郷が初代「舞鶴鎮守府司令長官」だった(1901)ことを理由に、(町おこしの為)、『肉じゃが発祥地』と宣言しました(1995)。

すると、**呉市**も、東郷は帰国後「呉」に在任した(1890)のは、舞鶴より10年も前だから、『肉じゃが発祥』は、「呉」の方が早い…と、論争(1998)に挑んだ、と言うより双方の宣伝効果を高め合う為の茶番論争と見るべきでしょう？

因みに佐世保では、戦後、米海軍基地が設置され、音楽や食、ファッションなどアメリカ文化がもたらされたことから、その一つ「ハンバーガー(“佐世保バーガー”)伝来の地」とされています。

(5)日清戦争勝利へ 呉軍港の功績

🌟 こうして呉鎮守府開庁から僅か数年後、「日清戦争」(1894-95)勃発には、**呉軍港**や、**広島**(陸軍)からは大勢の兵士が出征し、海陸で凄まじい戦闘が戦わされました。

しかしそれは、**東郷艦長**の巡洋艦「浪速」などの活躍により勝利し(前述)、朝鮮半島と台湾、及び多額の賠償金も獲得する大収穫を得ました。

それは、朝鮮から大勢の徴用工を徴募し、欧米から大量の資材輸入し、舞鶴鎮守府開庁資金や、インフラ工事や軍事施設や、あらゆる産業基盤の強化など「国力増強に弾み」がつけました。

しかし戦場は朝鮮半島や遼東半島です。負傷兵は呉海軍病院で治療されましたが、「戦場の凄惨さや残酷さ」は、大本営の検閲を通して日本国内にはどの程度伝わったでしょう(？)

正岡子規は従軍記者として派遣されたが現地に着く時は戦争が終結し、滞在2日で帰国しました。その際、松山~広島間を行き来し、船中から呉軍港の活気を俳句に詠んでいます。

(6)日露戦争勃発と 東郷平八郎の功績

しかし東郷平八郎を、もっと**世界の英雄**にした「日本海海戦」は、その 10 年後に勃発しました。

つまり日清戦争勝利で 朝鮮半島を獲得すると、目の前の遼東半島(旅順)には、ロシア軍が先入りして要塞を築き、折角手にした朝鮮半島に侵略準備をしていた。



しかし強国ロシアとの戦争には勝ち目はありません。真に「**国家存亡の危機**」と言う非常事態に、海軍大臣 山本権兵衛は、東郷を「**連合艦隊司令長官**」に任命しました。

しかし日本政府は「戦争回避方針」で、日露間交渉が続けられました。しかし結局決裂し、肅々と朝鮮半島侵攻を進める「**強国ロシア軍**」対、絶対に引くことのできない「**弱国日本軍**」の正面衝突(日露戦争)に突入しました。

結果は、最大の山場となった「日本海海戦」では、**東郷平八郎(連合艦隊指令長官)**や、加藤友三郎、広瀬武夫や秋山真之ら、**呉鎮守府**由縁の将校たちの活躍により奇跡的勝利を収めました。

それには、英国(日英同盟)の協力があつたこと、海軍工廠が整備され、艦船の補強や修理がスムーズにできたこと、遠路回航のバルチック艦隊の士気の乱れ、艦隊を発見及び対戦の気象条件に恵まれたなど、「幾重もの幸運に恵まれて偶々勝てた…」と東郷平八郎は述懐していました…。

(7)日露戦争勝利と、満州への侵攻

『**強国ロシアに勝利**』は、辛勝とは言え「**国家存亡の危機**」から、新たな領土をも獲得(?)すると言う「**天地動転の快拳**」でした。つまり「**満州**」には、豊富な地下資源も、広大な農業用地も、都市開発用地も…無限に広がる、真に「**宝の大地**」です。日本軍は、敗残兵を追って満州内部まで侵攻すると、新たな都市(国家)建設を進め、日本の国力は破竹の勢いで増強していきました。

しかし日露戦争に、若し敗れるか、若しくはバルチック艦隊が(発見できず)ウラジオストック艦隊と合流していれば、現在の日本も、ロシアも、世界はどのような勢力図になっているでしょう(?) 世界にとっても、非常に大きな岐路になったことは間違いありません。

(8)加藤友三郎

ところで、日清戦争、日露戦争の劇的勝利、及びその後の歴史について東郷平八郎と並んで、加藤友三郎の功績も忘れてはなりません。

◆加藤友三郎とワシントン軍縮会議(1921)

第一次世界大戦後、アメリカは、各国の建艦競争エスカレートを懸念し、特に「好戦的」と悪評の日本に水をさす軍縮案=「**五五三艦隊案**」が提唱された。しかし日本全権代表として臨んだ加藤友三郎は、(大勢の予想に反し)軍縮案に積極的に賛成しました。

その理由は次の様に述べています。



国防は軍人の専有物にあらず。戦争もまた軍人にてなし得べきものにあらず。米国と戦争になれば、戦費は、10数年前の日露戦争の比ではない、しかも外債に依じてくれる国は、米国以外に見当たらない。結論として日米戦争は不可能だ。国力に応じた武力を備え、外交手段により戦争を避けることが国防の本義なりと信ず。

◆内閣総理大臣に就任(1922)

✚ 当時、国際連盟設立にも消極的で、満州侵攻(後述)に傾注する日本は、好戦的と悪評を買っていたのを払拭し、加藤は「アドミラルステイツマン」と崇められました。そして翌年、広島県出身者として「初」の内閣総理大臣に就任しました。しかし翌年、僅か1年で病没しました。

その後、加藤の本意は如何に処遇されたでしょう・・・？

結果は、次表(最下欄)の通り没後数年に「張作霖爆殺事件」、その数年後には「満州事変」、更に数年後には「日中戦争」、そして遂に「日米開戦」・・・と、加藤が危惧した通りの道を次々進んでいきました。

◆加藤友三郎の主な軍功

年代	出来事	功 績
1894-95	日清戦争	巡洋艦「吉野」の砲術長として「定遠」「鎮遠」を相手に活躍
1904-05	日露戦争 (日本海海戦)	東郷平八郎(連合艦隊司令長官)、加藤友三郎(参謀長)、秋山真之(参謀)らは敵弾雨霰する「三笠」艦橋で兵士を鼓舞
1909-		呉鎮守府司令長官
1913		寺内・原・高橋 3代内閣で海軍大臣に留任した
1921	ワシントン軍縮会議	日本全権代表として派遣
1922-23		内閣総理大臣(海軍大臣兼務)
加藤没後の戦況	1928 張作霖爆殺事件、1931 満州事変、1933 国際連盟脱退、 1937 日中戦争、1941 日米開戦(太平洋戦争)	

(9) 日露戦争勝利～満州事変～日中戦争

◆張作霖爆殺事件

✚ 日露戦争当時、満州は清国(後の中国)領土で張作霖が統治していました(前述)。しかし張作霖は ロシアの支援を受け、ロシアは事実上「自国領」の様に 鉄道を敷設し旅順に要塞を建設していました。しかしそこは、大勢のロシア人も住んでいましたが、元々清国(後の中国)領土です。

そこに「日本軍」が侵攻すると、(ロシアと肩代わりする様に)「理想国家建設」を始めました。しかしその後、約 20 年後(加藤の没後数年)には事情は変わっていました。つまり;

- ◆日本(関東軍)は、「満州」に巨費を投じ、「理想国家(王道楽土)」建設を進め、事実上自国領同然の感覚になっていた。
- ◆新制中国(蒋介石政府)は、(清国滅亡後)国内体制が整い、「中国全土統治」を目指して、満州統治権を取戻そうとした
- ◆「張作霖軍閥」は勢力を拡大し、ソ連や欧米とも接近して満州支配を固める動きをした。

それには、

- ① 先ず中国政府(蒋介石軍)が、張作霖軍閥討伐軍(北伐軍)を派遣すると、
- ⇒② 関東軍は先回りして(張作霖の乗る)列車爆破「張作霖爆殺事件」(1929)を断行して、
- ⇒③ 「満州」は、事実上、関東軍(日本)の「占領状態」になった。

しかしそれは、満州全土に「反日・抗日の嵐」を巻き起こし、嫌日事件が頻発した。それは更に日を追う毎、益々拡大し、結局、次の経過で日中間の戦闘が、次々拡大していった。しかし、勢いに乗る関東軍は、「張作霖爆殺事件を断行して、事実上「満州を占領」しました。

◆満州事変

ところがそれは、満州全土に「反日・抗日の嵐」が巻き起こり、嫌日事件が絶えなくなると、関東軍(石原莞爾)は鉄道線路爆破(柳条湖事件=1931)を自作自演しました。

つまり、南満州鉄道の線路を故意に爆破し、即座に『満州人の犯行 !!』と断定して、間髪入れず「満州全土攻撃」を断行した(満州事変=1931)。

そうして極めて短期間に「満州全土を制圧(占領)」し、その勢いで傀儡国家「満州国」に仕立て上げ(建国)しました。

しかしそれは、世界中どの国からも承認が得られず、「反日・抗日の嵐」は、満州内に留まらず中国本土にまで拡大し、(中国内)居留邦人を守る為、関東軍は片時も攻勢を弛められなくなりました。

◆盧溝橋事件～日中戦争

そんな緊張状態の中で「盧溝橋事件」(1937)が偶発しました。

その対処に当って石原莞爾は、「大東亜共栄圏構想(=日・中・朝・満・蒙の五族協和)」を唱えて『戦争不拡大』を主張しました。しかし結果は東条英機らの『暴支膺懲論(=中国全土を殲滅すべし)』と言う主張に押し切られ『中国全土攻略』が開始しました。

それには、内地からも陸軍師団や、吳鎮守府などから「陸戦隊」が次々派遣され、「上海事変」を突破口に、本格的な「日中戦争」に突入していきました。



しかし中国(蒋介石)政府は、「(日本の)満州違法占領や、中国本土違法侵略」を世界に訴え、米英から武器支援された為、(日本は)局地戦で幾ら勝利しても疲弊が嵩む泥沼状態に陥っていきます。

(10) 吳界限の賑わい

日中はそんな緊迫状態にあっても、満州では着々と超近代的な「理想国家(王道楽土)建設」を進めていました。満州鉄道や農地開拓などのインフラ建設や、奉天・新京・大連などの超近代的な都市建設、及び商工業や農産業充実、金融、教育、警察・・・等々各種制度も着々と整え、日本内地から大勢の満蒙開拓団移民も受け入れました。

内地の土建業者や商工業者(吳関係では千福酒造や建設業者など)も大いに潤いました。

★特に、**呉鎮守府**は海軍の中心的役割を担っていたので、

呉海軍工廠では戦艦や、巡洋艦、潜水艦、航空母艦などを次々建造し、「景気は呉から～」と、電気、ガス、水道、市電などはいち早く開通し、盛り場にはモダンな喫茶店やレストラン、ビリヤード、料亭や朝日遊楽街、花街、映画館などが建ち並び・・・、艦隊の出入港などでそんな情報もいち早くもたらされたのではないか(?)・・・、「満州国」祝賀ムードで沸きに沸いていました。

昭和10年(1935)開催の「国防と産業大博覧会」は2ヵ月足らずの入場者70万人という盛況で、その勢いは世界最大戦艦「大和」建造にと引継がれていきます。

(11)太平洋戦争へのレール

★しかし日中戦争は、米英の参加で益々泥沼化し、しかし外交による解決は、満州や中国戦線や南方からの撤退(つまり⇒満州返還も迫られる様な条件)は、到底受入れられません。それは日本国家が成り立ちません。

しかし(日本への)石油禁輸制裁や経済制裁が課せられると、それを東南アジアに求めて、東南アジア～南太平洋諸国に侵出し(南方作戦)、厳しい財政から大枚をはたいて「戦艦大和」建造計画も俎上しました。しかし既に「飛行機の時代」になっており、山本五十六らは激しく中止を訴えたが、大きな歯車はコントロールしようもなく、戦艦大和の建艦は計画通り進みました。

★しかしこれまで戦場は、全て朝鮮半島や中国大陸です。「戦争の凄惨さや残酷さ」は、大本営発表や、大本営監修のマスコミ情報を通して、内地国民には、如何に伝わっていたでしょう？

日清、日露、満州事変、日中戦争と・・・、「連戦連勝の報」と共に、命がけで”糧”を持ち帰る軍隊を、全国民は絶賛していました。

こうして南方侵出も、戦艦大和建造も、日独伊三国同盟も、日ソ中立条約締結も、着々と準備が整い、陸軍将校や国民世論も「鬼畜米英」を合言葉に、対米戦争に向け戦意は熟していました。

しかしここで、若し“大和”の建造を断念したとすれば；

- ★真珠湾攻撃を「先送り」できたとしても、対米戦争は回避できたでしょう(?)
- ★戦後の日本発展や、呉の発展はどの様になっていたでしょう(?)

“大和”建造により培った「新技術開発や貴重な経験」が、戦後に引継がれたから**呉**は重工業都市に発展し、日本は世界第二位の経済大国に躍進する 強固な”基盤”になっています。

(12)太平洋戦争突入

◆太平洋戦争突入～ミッドウェー海戦

★こうして遂に(1941/12/8)、参加艦隊との無線信号；『ニイタカヤマノボレ』、『トラトラトラ』の送受信と共に、**柱島泊地**には、連日艦船や輸送船団が堂々の雄姿見せて太平洋戦線に向かいました。

しかし約半年後、ミッドウェー海戦(1942-6)の大敗を境に戦況は悪化の一路を辿ります。

ミッドウェー海戦は、米豪の連係を遮断し、あわよくばハワイの太平洋艦隊に壊滅的損害を与えて早期



新京；大同大街（康徳会館）



奉天；大和ホテル

講和に導く…そんな予見から連合艦隊山本五十六司令長官が強硬に主張し、日本海軍の最精鋭空母と最強艦隊を投入して奇襲攻撃の筈だったが…、しかし、

アメリカ軍は、飛行機を補足するレーダーを実用化し、日本軍の暗号も解読して待ち伏せする包囲網に突っ込み、最精鋭空母「赤城、加賀、蒼龍、飛龍」=4隻と、多数の航空機、優秀なパイロットを悉く失う惨敗に終わり、その後成す術もなく、太平洋の島々は順次に陥落・玉砕に追込まれていきました。

◆ 柱島泊地

その翌年(1943/6/8)、**柱島泊地**には、「大和」や「長門」など、太平洋戦線に向かう艦船や輸送船団が雄姿を見せて集結していました。所が、停泊中の戦艦『陸奥』が、突然、謎の爆発で沈没する事故が起きました。『陸奥』は、「大和」建造まで我が国最大級の戦艦で、爆沈により乗員 1,100 人余りが犠牲になりました。しかし当時【爆沈事実隠ぺい】の為、乗組員(生存者=353人)は本土上陸が許されず、離島に隔離されて次の出征地(多くはアッツ島)で玉砕と聞いています。



1971(昭和46年)までに『陸奥』の艦体は一部が引き上げられ菊の御紋章や主砲などが陸奥記念館に保存されています。兵士の遺品は、当時を思いながら見ていると異様な感慨に引き込まれます。

◆ 出征兵士たち

江田島には海軍兵学校があり、**呉**には海兵団や陸戦隊も編成され、日清、日露戦争から太平洋戦争終結まで、大勢の兵士たちが、現自衛隊集会所で家族と面会し戦地に出征していきました。陸軍も、**広島**に鎮台(後に第5師団)が置かれ、**宇品(広島)港**から大勢の兵士が出征しました。

それも太平洋戦争初期までは、戦時色と言うより、凱旋帰還の艦船などもあり、呉界限はかなり賑わっていたのではないかと思います。

しかし戦争末期、本土空襲が始まり、食糧不足、学童疎開等々…、戦況悪化と並行して、万歳三唱に「武運長久」を託して兵士の送り、送られる光景が常態化しました。

海軍兵学校は各地に分校が開校し、大勢の学生が入学し、短期間に繰上げ卒業して神風特攻機に乗機しました。**江田島**(現海上自衛隊術科学校)に遺されている、明日は命を失う大勢の少年兵の遺書に胸が詰まされます。

◆ 戦況悪化 ～ 日本本土空襲


ミッドウェー海戦の大敗を境に、太平洋戦線は「ガダルカナル ⇒ ソロモン ⇒ マリアナ サイパン ⇒ レイテ ⇒ 沖縄」と、遠方の島々から順に陥落し、サイパンまで陥落すると、敵機による本土空襲が本格化します(1944 年末頃～)。戦況悪化は、極度の金属不足に日用品雑貨まであらゆる金属が回収され、コンクリート船も出現(1944)しました。それに伴い、憲兵の取締りは益々厳しく、市民も学童も、食料不足と栄養失調と空腹に悩まされながら、防空訓練や勤労奉仕などに忙殺されていました。

しかしそんな折、**呉湾や周辺海域**には 消沈ムードをかき消す様に “大和”など 健全な艦船団が勢揃いし人々は安堵しました。しかしそれを雄壮と見たか? 悲壮と見たか?、燃料不足で出撃不能な戦艦群でした。その中から “大和”は最後の期待を背負って、沖縄戦に向け特攻出撃しました(1945/3)

こうして沖縄戦に続き、本土空襲が本格化すると、連日、100機編隊の爆撃機が、1波、2波、…と来襲し、東京、大阪、名古屋など…主要 200 都市以上が完膚なく焼き尽され、呉市街も跡形なく焼かれました。海軍工廠は一部を遺して爆破され、**呉湾**に勢揃いした艦船群も 1隻残らず、沈座する臥体と化しました。

空襲は親にも子にも容赦な、家族や身寄りを奪い、酷い食糧難の中で身寄りのない幼子たちは路頭に寝泊りし、捨てられる残飯や食べカスをあさりながら、その後どのような様にして生き残ったでしょう(?)・・・。

(13) 海軍遺構その後【アレイからす小島】

しかしそんな出来事は今は伝説と化し、構築物も殆どが新しい工場群と入れ替わっています・・・。

それでも「アレイからす小島」には、当時のレンガ造り建物や、300mにわたる《切石組み護岸》や、魚雷や弾丸の積出し棧橋とトロココレール、英国製クレーンなどの遺構には、そんな「日本近代化の歴史」がちりばめられています。目の前に停泊する最新護衛艦や潜水艦と見比べながら 懐古してみるのも一興です。■

